

古文 読解問題 「十訓抄／大江山」①

和泉式部、保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるを、小式部内侍、歌詠みにとら^アれて、歌を詠みけるに、定頼の中納言たはぶれて、小式部内侍あり^イけるに、「^①丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなく思すらむ。」と言ひて、局の前を過ぎ^ウられけるを、御簾より半らばかり出でて、わづかに直衣の袖を控へて、

②大江山いくの道の遠ければまだふみもみず天の橋立

と詠みかけり。思はずに、あさましくて、「こはいかに、かかるやうやはある。」とばかり言ひて、返歌にも及ばず、^③袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより、歌詠みの世におぼえ出で來^エにけり。

これはうちまかせて理運のことなれども、かの卿の心には、これほどの歌、ただいま詠み出だすべしとは、知られ^オざりけるにや。

問一・次の「十訓抄」について説明された文の空欄（ア）～（）にはいる言葉を答えなさい。

「十訓抄」は（ア）時代の中期ごろに書かれた（イ）集で、作者は分かつておらず湯浅宗業など様々な説があります。三巻十篇の構成で、（ウ）的思想のもと集められた説話が、十個の教訓に分類されています。（エ）と重複する説話も多く含まれています。

問二・傍線部ア～オの助動詞の意味を答えなさい。

問三・傍線部①「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなく思すらむ」についての説明として最も適切なものを次の選択肢から選びなさい。

ア・小式部内侍が、丹後へ下つた母に送つた使いがまだ戻つてこないことに對し不安を抱いている。

イ・小式部内侍が、母の代わりに歌合せに出席するが、上手く詠むことができるか心配になつてゐる。

ウ・定頼の中納言が、代わりに歌を詠む人がいなくて不安だらうと小式部内侍をからかっている。

エ・定頼の中納言が、丹後から戻つてこない和泉式部になにかあったのではないかと思つてゐる。

問四・傍線部②「大江山いくの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」に含まれている掛詞をすべて抜き出し
その意味を答えなさい。

問五・傍線部③「袖を引き放ちて、逃げられけり」とあるが、定頼の中納言がこのような行動をとつた理由を五
十文字以内で答えなさい。

読解問題「十訓抄（大江山）」① 解答・解説

問一. ア. 鎌倉 イ. 説話 ウ. 儒学 エ. 古今著聞集

- 問二. ア. 受身
イ. 過去
ウ. 尊敬
エ. 完了
オ. 打消

問三. ウ

：傍線部のセリフを言った人物は「定頼の中納言」で、傍線部の前に「たはぶれて」と書かれていることから「小式部内侍」のことをからかっているのだとわかる。

問四. 「いくの（生野という地名・行くのという動詞）」／二「ふみ（手紙を意味する文・踏みという動詞）」

問五. 小式部内侍が詠んだ歌に対しての返歌が思い浮かばず、その場に居るのがいたたまれなくなつたから。
：直前に「返歌にも及ばず」と書いてあることから、返歌が浮かばず、その場にいれなくなつたことがわかる